

健康

がんと生きる

第4部 シニア世代

④罹患の高齢化

「天寿がん」という言葉を耳にしたことがありますか。「さしたる苦痛もなしに、あたかも天寿を全うしたように人を死に導く超高齢者のがん」を、こう呼んでいるそうだ。

北大大学院医学研究院の田中伸哉教授(55)は腫瘍病理学Ⅱによると、病死した人の死因、診断、治療などを医学的に検証する病理解剖をすると、がん以外の病気で亡くなった高齢者に、何も症状がないがんが偶然見つかることが多いという。「前立腺や甲状腺が圧倒的に多い。胃や大腸などに見つかる人もいます。潜在がんと呼んでいます」

92歳 天寿全う

二十数年前、北大で典型的な天寿がんと言われる患者がいたという。

女性。90歳を過ぎ、肝臓に直径12センチのがんがあることが分かった。がんの症状はなく、とても元気で、茶道を教えていた。家族や医師は、その生活や年齢を考え、積極的な治療はせず、何もしないことが、この女性には最善の治療だと判断

症状ないまま「大往生」も

した。その後、1年2カ月ほど元気に過ごし、大往生を遂げた。92歳だった。

本人にがんを告知したかどうかは定かではない。女性。死後、病理解剖を受けたという。医学研究院の地下1階にある腫瘍病理学教室の資料室に、剖検記録や病理標本など資料一式が保存されていた。大きながんの塊が写った肝臓の写真もあった。「2140号」と記録されていた。

田中教授は「がんは時間をかけてゆっくりと増殖し、ここまで大きくなったのでしょう。痛みがなく、亡くなる直前まで茶道を教

理学が専門の小林博さん

本人にがんを告知したかどうかは定かではない。女性。死後、病理解剖を受けたという。医学研究院の地下1階にある腫瘍病理学教室の資料室に、剖検記録や病理標本など資料一式が保存されていた。大きながんの塊が写った肝臓の写真もあった。「2140号」と記録されていた。

田中教授は「がんは時間をかけてゆっくりと増殖し、ここまで大きくなったのでしょう。痛みがなく、亡くなる直前まで茶道を教

理学が専門の小林博さん

理学が専門の小林博さん

「がんはこの年齢の方でもありますが、日本人は平均すると70歳前後でがんにかかり、70代後半でがんを命を落としています。罹患と死亡、どちらの平均年齢も男女とも年々延びており、がん年齢の高齢化が進んでいます」

こう話すのは、がんの病理学が専門の小林博さん

「世の中の暮らしが豊かになって、がんへの関心が高まり、がんの原因となるようなものを遠ざける余裕のある社会になりました。こうした目には見えない生活環境や社会環境などの変化によって、国民みんなが長生きするようになったか

らではないでしょうか」と推測する。

「がんはこの年齢の方でもありますが、日本人は平均すると70歳前後でがんにかかり、70代後半でがんを命を落としています。罹患と死亡、どちらの平均年齢も男女とも年々延びており、がん年齢の高齢化が進んでいます」

こう話すのは、がんの病理学が専門の小林博さん

「世の中の暮らしが豊かになって、がんへの関心が高まり、がんの原因となるようなものを遠ざける余裕のある社会になりました。こうした目には見えない生活環境や社会環境などの変化によって、国民みんなが長生きするようになったか

らではないでしょうか」と推測する。

環境の変化で

「世の中の暮らしが豊かになって、がんへの関心が高まり、がんの原因となるようなものを遠ざける余裕のある社会になりました。こうした目には見えない生活環境や社会環境などの変化によって、国民みんなが長生きするようになったか

らではないでしょうか」と推測する。

小林博さん



小林博さん

次回は「専門家に聞く」です。26日に掲載します。

北海道新聞は、道民の命を守り、患者らを支える、「がんを防ごう」キャンペーンに取り組んでいます

